

「須恵器からみた古墳時代のぐんま」

目次

開催にあたって	1
序 章 須恵器とは	2
第1章 ぐんまにやつてきた須恵器	6
コラム 時間をはかるものさし	7
コラム 素敵なデザイン	11
第2章 古墳出土の須恵器	12
第3章 豪族層出土の須恵器	28
コラム 須恵器の坪蓋と土師器の模倣坪	29
第4章 マツリノ須恵器	32
終 章 祈りの須恵器が語るもの	42
【論考】	
「安房古墳群出土の須恵器」 小根澤 雪絵	46
展示資料一覧	50
掲載写真一覧	53
参考文献	56
展示協力機関・協力者	57

開催にあたって

須恵器は古墳時代から平安時代にかけて使用された土器で、弥生時代までの素焼きの土器とは違い、青灰色で堅く焼き上げられています。古墳時代に製品だけでなく製作方法を含め、朝鮮半島から伝来しました。

須恵器の名称は中学校の教科書にも登場します。多くの方がどこかで耳にしたことがあるのではないのでしょうか。しかし、どのような形の土器があるのか、どのように使われたかについてはあまり知られていません。

令和2年度、第29回特別展では「祈りの器」と題し、この「須恵器」を展示します。古墳時代の須恵器は古墳や集落内の祭祀遺構から出土しています。古墳時代の人々の「祈り」とは、その背景にある社会的な状況とはどんなものであったのか、この展示を通して考えていきます。

最後になりましたが、本特別展開催にあたり、貴重な資料の出品や写真の提供などいただいた所蔵者の皆様、ご指導いただきました関係諸機関、関係者の皆様により御礼申し上げます。

令和2年12月12日

かみつけの里博物館
館長 鈴木 潔

例言

- 本書はかみつけの里博物館第29回特別展「祈りの器」須恵器からみた古墳時代のぐんま」の展示解説書として編集した。
- 本特別展の企画はかみつけの里博物館で決定し、構成は原佳子（本館主査）が行った。横山千晶（本館主査）が補佐し、小澤麻美（本館嘱託職員）、高橋成花（本館臨時職員）の協力を得て、小泉純明（本館次長）が総括した。
- 本書の執筆・編集は、原佳子が行った。
- 論考は、小根澤雪絵（高崎市教育委員会文化財保護課 主任学芸員）が執筆した。
- 本特別展およびその関連行事は以下のとおり実施される。
○会期 令和2年12月12日（土）～令和3年3月1日（月）
○会場 かみつけの里博物館 企画展示室
○関連行事
◆ミニ講座 令和3年2月14日（日）午後1時30分～3時 当館研修室
「安房古墳群出土の須恵器」
講師 小根澤雪絵（高崎市教育委員会文化財保護課）
◆学芸員解説 時間 午後1時
令和2年12月13日（日）・令和2年12月20日（日）
令和3年1月17日（日）・令和3年2月21日（日）
◆解説員ミニ解説 時間 午前11時～午後2時
令和2年12月27日（日）・令和3年1月10日（日）24日（日）31日（日）
令和3年2月7日（日）28日（日）
※新型コロナウイルス感染状況により、関連行事が変更になることがあります。最新情報は当館ホームページでご確認ください。
- 本特別展展示資料の所有者および所蔵先は巻末「展示資料一覧」に明示した掲載写真の提供者および所蔵先は巻末「掲載写真一覧」に明示した。
- 遺跡名称は紙面の都合により略称を使用したものもある。但し、項立てや初出はできる限り正式名称を用いた。
- （例）少林山 遺跡 12号墳・少林山台 12号墳
本特別展開催にあたり下記の機関より後援をいただいた。
朝日新聞前橋総局、NHK前橋放送局、FM GUNMA、共同通信社前橋支局、群馬テレビ、群馬よりどり、産経新聞前橋支局、J-COM群馬、時事通信社前橋支局、上毛新聞社、高崎朝日新聞、東京新聞前橋支局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、ラジオ高崎

【前二子古墳】

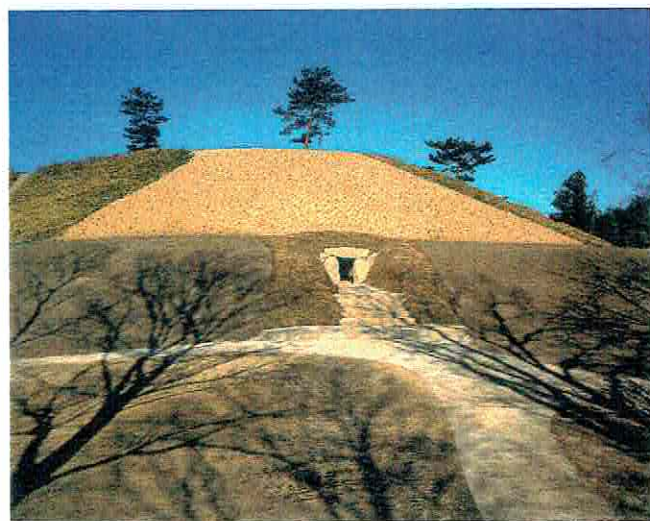
前橋市西大室町に所在する大室古墳群のうちの一基です。大室古墳群は赤城南麓の台地上に位置し、南麓最大の古墳群です。前二子・中二子・後二子の三基の後期大型前方後円墳で構成され、この順で築造されています。前二子古墳は全長九十四m、六世紀初頭の築造と考えられます。上部部は全長十四mにも及ぶ横穴式石室です。石室は明治十一年に発掘調査が実施されました。この時、行われた調査で出土した資料については、詳細な絵図が残されています。石室内の様子を記した絵図からは資料の出土状況もわかっています（前原二〇一五）。



前二子古墳



石室内に復元された須恵器配列



石室と墳丘

また、近年では古墳の史跡整備に伴う発掘調査や資料の再検討を行うシンポジウムなども開かれ、須恵器に対する研究も進んでいます。石室内からは、筒形器台、高環形器台、提灯、直口壺、高環などが出土しています。土師器は坪、高環、台付壺などが出土しました。前二子古墳の須恵器は胎土や焼成から同一工人によるものとみられます。これら須恵器は藤岡産とみられています（藤野二〇一九）。共存する土師器や製作方法の特徴から、五世紀後半から六世紀初頭の土器とみられます（前原二〇一五）。



石室内出土須恵器



石室内出土土器

明治11年の記録により、配置状況や器台に提灯がのせられていたとみられる様子などもわかっています。



須恵器 高環形器台



須恵器 高環形器台



須恵器 小像付筒形器台



筒形器台の小像

【筒形器台の小像】
小像付筒形器台には、四種の小像「トリ」「ヘビとカエル」「刺蝐」「刺がれた後」「カメ」が表現されています。装飾器台としての筒形器台は国内でも類例が僅かで希少な資料といえます。